

〈学術論文〉

大学生における家族関係認知の 理想と現実のズレが精神的健康に及ぼす影響

白崎小春¹ 信州大学教育学部教育カウンセリング課程
村上千恵子 信州大学教育学部教育科学講座
鈴木俊太郎 信州大学教育学部附属教育実践総合センター

キーワード：家族イメージ法，視線交錯度，精神的健康

1. 問題と目的

我が国における自殺者数は、平成10年度以降、3万人を超える高い水準で推移している。抑うつなどの心の問題の増加が指摘されており、人々のメンタルヘルスの管理は重要な課題の1つとされている。中でも大学生の年代は、青年期特有の不安定さを有し、様々な心理的問題の発生する時期である(沢崎・松原, 1988)。

児童期・青年期の精神的健康には家族関係が影響する。西出・夏野(1997)は、子どもが認知する家族機能の障害は、抑うつの促進因子となることを明らかにし、亀口(1997)は、家族に不満を持つ児童は精神的健康度が低くなることを指摘している。

不満とは現状に満足しておらず物足りなさを感じていることであり、現実と理想とが一致していないために起こる状態だと考えられる。Rogers(1951)は、「現実自己」と「理想自己」を取り上げ、両者のズレが小さい方がより適応的だとして適応の指標を示した。それ以降、青年期を対象に「現実自己」と「理想自己」に関する多数の研究がなされ、「現実自己」と「理想自己」のズレの大きさと適応との間に有意な負の相関を見出している。

現実と理想のズレは個人内に生じるだけでなく、子どもを支える父母など家族関係の中にも、現実と理想の家族関係や適応状態は波及する。草田(1995)と茂木(1996)は、現実の家族図式において、大学生は父母間の心理的距離が家族の健康度と深く関連し、父母の距離が離れているほど、家族の心理的健康度が低いとか、問題解決が的確になされていない傾向を示した。現実と理想の家族図式においては、家族成員の心理的距離のギャップが大きいほど、現実の家族関係に満足していない傾向があることも示した(草田, 1996)。

子どもの精神的問題を理解しながら心理療法を進めるにあたり、家族関係を無視することはできない(高橋, 2008)。子どもが不適応を起こした場合、子ども

¹ 福井県福祉・心理職

と父母との心理的距離や役割などに問題がある場合が少なくない。そこで、子どもだけを単独で治療せず、家族全員を一つのシステムとして相互関係に着目し、治療すると効果があがる。これを家族療法と呼び、家族システム理論が生まれた。

本研究は、父・母・子の家族全員を一つのシステムとしてとらえ、相互関係に着目する家族システム理論をもとに、両親から完全には自立していない青年期の大学生が認知する現実の家族と理想とする家族像の違いに着目し、精神的健康度を調査する。

家族関係を査定する方法としては、明確に言語化された家族関係だけでなく、非言語的、あるいはイメージ的な家族関係も重要とされている(柴崎・丹野・亀口, 2001)。代表的な方法として、家族関係単純図式投影法や家族イメージ法などが挙げられる。

小島(2011)は、家族関係単純図式投影法を用いて、現実の家族図式を4つに分類したが、余白の感じ方や、距離の捉え方が個々によって異なるため、距離だけの指標では家族図式を十分に分類しきれなかった。

秋丸・亀口(1988)は、家族システム論を背景として、家族構造を把握する一助として家族イメージ法を開発した。家族の成員同士の関係を図式化して表現する投影法である。ケベック家族造形法(KFST: Kvebeak Sculpture Family Technique)をアレンジし、家族内相互作用ができるだけ反映されるように作成されている。具体的には、家族成員を表す円形シールを用いて、一辺15cmの正方形の枠が書いてある用紙に家族関係を図式化させるものである。円形シールは、直径1.5cmで白から黒の5段階に色分けされ、色は各家族成員のパワーの強度の違いを表し、各成員(シール)の間を3段階の線で結び、結びつきの強さを表す。シールの濃さは、黒色に近づくほどパワーが強く、白色に近づくほどパワーが弱いイメージされていることを意味する。シールの結びつきの強さは、線は各二者間の結びつき(絆)の強度を表すものである(亀口, 2003)。さらに、円形シール内の▲(鼻)の印が、各家族成員の向きを表す。

先行研究では、家族関係単純図式投影法で現実と理想のギャップを扱った研究は存在するが、距離だけの指標では家族関係を査定する方法として限界があった。家族イメージ法では、「向き」を考慮することで、より明確な家族関係の認知を把握できると思われる。

本研究では、徳田・柴田ら(2005)が考案した、向きを直接計量する「視線交錯度(向き合い度)」を用いて「向き」についても検討する。家族成員同士を表すシールの中心とシール内の印(鼻)の向きの延長線を引き、二者間において、その線が交わった角度を「視線交錯度」として数量化する。視線交錯度0度は、二者間の直線が交わらない状態を表している。視線交錯度180度は、互いに向き合っている直線を示す。

視線交錯度は、0度から180度の範囲内で測定され、角度が大きくなるほど、二者間は互いに「向き合っている」ことを示している。

以上より、本研究の目的は、投影法による家族イメージ法を用いて、大学生を対象に現実の家族関係の特徴を明らかにし、質問紙法を用いて客観的に精神的健康度との関連を検討する。加えて、各家族間成員の関係性の指針となる理想の家族関係の特徴を明らかにする。

仮説は以下の通りである。

1. 父母間の距離が離れ、向き合っていない現実パターンは精神的健康度が低い。
2. 現実と理想の家族イメージ図において、心理的距離と向きのズレが大きいほど、精神的健康度は低い。

2. 方法

2.1 調査協力者及び調査方法

信州大学の大学生101名を対象に質問紙調査を行った。分析では、父母・父子・母子の距離と視線交錯度を基準にしたため、父子・母子家庭はこの家族分類の分析対象とはせず、96名(男性28名、女性68名、平均年齢20.92歳、範囲19～26歳)を対象に分析を行った。縁故法により個別で実施し、実施時間は約20～30分だった。

2.2 質問紙の構成

(1) University Personality Inventory(以下、UPI)

大学生のメンタルヘルスの実態を調査するために、全国大学保健管理協会(1966)が作成した調査表であるUPIを使用した。全60項目で、精神症状に関する40項目と身体症状に関する16項目の自覚症状を示す56項目と、陽性項目の4項目からなる。回答は、各項目につき「はい」か「いいえ」のどちらかに○をつけるよう求めた。

(2) 家族イメージ法

A4版(見開き)で、左ページに実施要領を記載し、家族イメージの投影は、右ページに描かれた一辺15cmの正方形の枠内を使用した。

①教示は口頭で、「あなたの家族がそろっているときの家族関係を思い出して、四角の枠内にシールを貼って下さい。」と簡単に方法を説明した。直径1.5cmで色の濃さが5段階あるシールから家族成員に合うシールを選び、枠内に自由に配置してもらった。

②家族内の2人がそれぞれどのような関係であると思うかを、線で記入してもらった。

③次に同様の正方形が描かれたA4用紙を配り、「こうであつたらいいなという理想の家族関係を考え、シールを貼って下さい。」という教示を口頭で与えて図式化させた。

④質問紙上に自由記述欄を設け、各家族図式について説明の記載を求めた。

3. 結果

家族図式として、調査協力者の家族成員全てが含まれるものを作成させたが、本研究では、調査協力者自身とその父親、母親の3者関係について分析を行った。それぞれのシールの中心間の距離を求め、父子、母子、父母の距離とした。視線交錯度については、徳田・柴田ら(2005)の方法に基づき測定した。

3.1 家族図式のパターン分類とその特徴

(1) 現実の家族図式のパターン

大学生は現実の家族をどのように認識しているかを調べるために、家族図式の父母間、父子間、母子間の平方ユークリッド距離を求めて、ward 連結法によるクラスタ分析を行った。4つのクラスタを抽出し、「r1型」「r2型」「r3型」「r4型」とした。r1型には28名、r2型には24名、r3型には32名、r4型には12名の調査協力者が含まれていた。表1は、各成員間の距離と視線交錯度の平均値を現実の家族パターン別に示したものである。また、各クラスタ別に現実の家族パターン図を図1、図2、図3、図4に示す。

まず、現実の各成員間の距離の相関を求めた。「父母距離」と「父子距離」($r = .54, p < .01$)、「父母距離」と「母子距離」($r = .43, p < .01$)、「父子距離」と「母子距離」($r = .44, p < .01$)がいずれにおいても中程度の相関を示したため、 4×3 の2要因混合計画を行った。その結果、交互作用は有意ではなかった($F(6, 184) = 1.81, MSe = 6.46, n.s.$)。現実の家族パターンの主効果($F(3, 184) = .60, MSe = 8.13, n.s.$)、現実の各成員間距離の主効果($F(2, 184) = 2.05, MSe = 7.35, n.s.$)、いずれも有意ではなかった。

同様に、現実の各成員間の視線交錯度の相関を求めた。「父子視線交錯度」と「母子視線交錯度」($r = .27, p < .05$)が弱い相関を示した。多重検定問題を避け、 $r < .30$ であるため、3指標間は相関しないと仮定した。そこで、4つのクラスタを独立変数、父母、母子間の視線交錯度を従属変数として1要因分散分析を行った。なお、父子間の視線交錯度においては、4型が平均値、標準偏差ともに0であるという特殊な型であるため、4型を除いた1要因分散分析を行った。その結果、父母、父子、母子のすべての視線交錯度に有意な差がみられた(父母： $F(3, 92) = 91.90, MSe = 860.59, p = .000$ 、父子： $F(2, 81) = 18.72, MSe = 2195.52, p = .000$ 、母子： $F(3, 92) = 92.69, MSe = 1173.47, p = .000$)。Bonferroni法で、父母と母子の視線交錯度の場合においては有意水準を $\alpha = 0.00078$ 、父子の視線交錯度の場合においては $\alpha = 0.0125$ に調整して多重比較を実施した結果、父母の視線交錯度では、r1型とr2型がr3型とr4型より大きいことが示された。父子の視線交錯度においては、r1型とr3型がr2型より大きかった。母子の視線交錯度においては、r1型とr4型がr2型とr3型より大きかった。

表 1 現実の家族パターンの平均値と標準偏差

	r1 型	r2 型	r3 型	r4 型
父母距離の平均	5.63 (1.94)	6.13 (2.50)	5.88 (3.59)	5.14 (2.47)
父子距離の平均	5.64 (2.15)	6.30 (2.77)	6.17 (2.65)	6.63 (1.55)
母子距離の平均	6.01 (2.56)	6.65 (3.81)	5.14 (1.95)	4.81 (1.47)
父母向きの平均	107.04(37.83)	106.13(35.17)	4.03(13.79)	15.17(23.73)
父子向きの平均	89.71(43.82)	10.08(21.10)	49.44(61.10)	.00 (.00)
母子向きの平均	134.18(35.52)	14.25(28.24)	24.78(40.14)	146.92(22.59)

注) 距離の平均は cm, 向きの平均は度, ()内は SD。

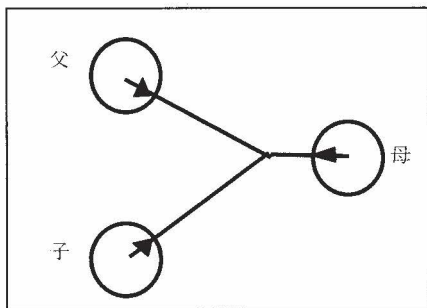


図 1 r1 型のパターン図

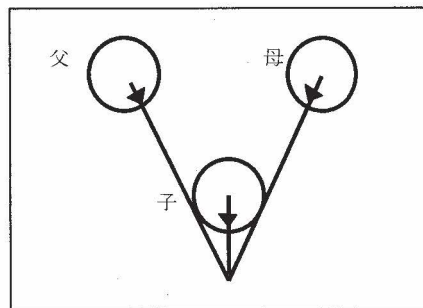


図 2 r2 型のパターン図

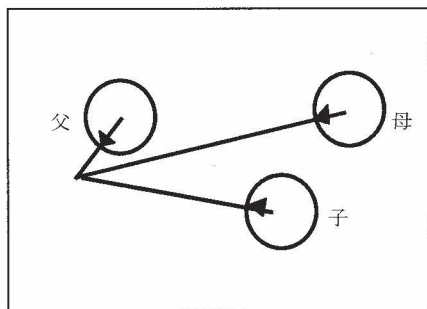


図 3 r3 型のパターン図

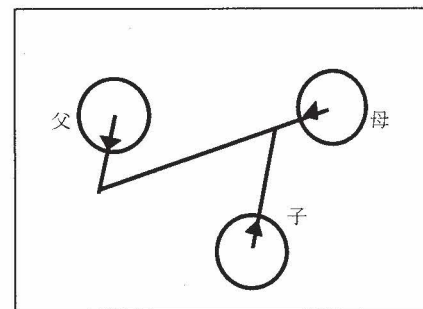


図 4 r4 型のパターン図

各クラスターの自由記述を調べたところ、r1 型は、「家族の仲がとてもよい」という記述が大半であった。r2 型は、「基本的に仲がよい」といったポジティブな記述と、「父は嫌われている」「私が家族からはずれている」といったネガティブな記述の両方が含まれていた。r3 型では、ポジティブな記述がある一方で、「父と母はあまり仲良くない」といったネガティブな記述も少数含まれていた。r4 型は、「母が全体を仕切っている」や「母は外交的で、父は無口である」といった記述が多かつ

た。

(2) 理想の家族図式のパターン

現実の家族図式の場合と同様にクラスタ分析を行った。4つのクラスタを抽出し、「i1型」「i2型」「i3型」「i4型」とした。i1型には24名、i2型には24名、i3型には15名、i4型には33名の調査協力者が含まれていた(表2)。また、各クラスタ別に現実の家族パターン図を図5、図6、図7、図8に示す。

まず、理想の各成員間の距離の相関を求めた。「理想父母距離」と「理想父子距離」($r = .66, p < .01$)、「理想父母距離」と「理想母子距離」($r = .64, p < .01$)、「理想父子距離」と「理想母子距離」($r = .66, p < .01$)がいずれにおいても中程度の相関を示したため、 4×3 の2要因混合計画を行った。その結果、交互作用は有意ではなかった($F(6, 184) = 1.65, MSe = 3.52, n.s.$)。理想の家族パターンの主効果($F(3, 184) = 2.91, MSe = 38.46, p = .039$)、理想の各成員間距離の主効果($F(2, 184) = 8.87, MSe = 18.85, p = .000$)いずれも有意であった。理想の家族パターン別に理想の距離に差があり、また各成員間別に理想の距離に差があるといえる。Bonferroni法で多重比較を実施した結果、有意差はみられなかった。

次に、理想の各成員間の視線交錯度の相関を求めたところ、有意な相関はみられなかった。多重検定問題を避けるため、3指標間は相関しないと仮定した。そこで、4つのクラスタを独立変数、各家族成員間の視線交錯度を従属変数として1要因分散分析を行った。その結果、父母、父子、母子のすべてにおいて有意な差がみられた(父母： $F(3, 92) = 64.29, MSe = 1318.93, p = .000$ 、父子： $F(3, 92) = 60.14, MSe = 1261.04, p = .000$ 、母子： $F(3, 92) = 27.17, MSe = 2131.66, p = .000$)。Bonferroni法で有意水準を $\alpha = 0.00078$ に調整して多重比較を行った結果、父母の視線交錯度については、i1型が最も大きかった。父子視線交錯度については、i3型とi4型がi1型とi2型より大きく、i2型が最も小さいことがわかった。母子の視線交錯度では、i4型がi1型とi3型より大きく、i2型の方がi3型より大きかった。

表2 理想の家族パターンの平均値と標準偏差

	i1型	i2型	i3型	i4型
父母距離の平均	6.06 (2.51)	4.44 (2.08)	5.49 (2.68)	4.29 (1.91)
父子距離の平均	6.27 (3.02)	5.94 (2.20)	6.31 (1.51)	5.25 (2.24)
母子距離の平均	6.36 (3.73)	4.81 (1.54)	6.84 (2.65)	5.04 (2.24)
父母向きの平均	167.92(17.77)	29.5 (42.20)	71.73(52.18)	64.97(33.07)
父子向きの平均	61.04(52.31)	1.25 (6.12)	118.87(26.23)	118.85(36.48)
母子向きの平均	57.08(48.79)	82.04(64.95)	2.33 (9.04)	126.3 (36.74)

注) 距離の平均はcm, 向きの平均は度, ()内はSD。

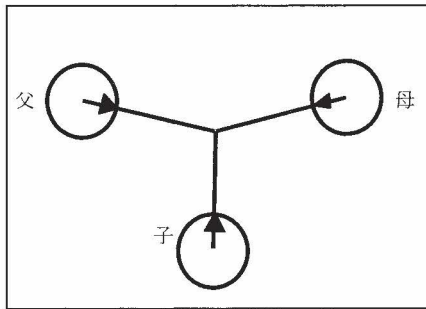


図5 i1型のパターン図

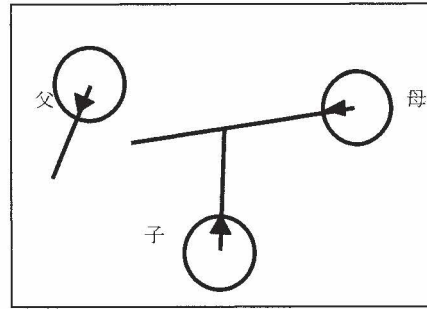


図6 i2型のパターン図

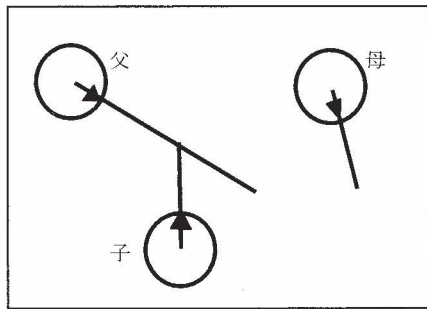


図7 i3型のパターン図

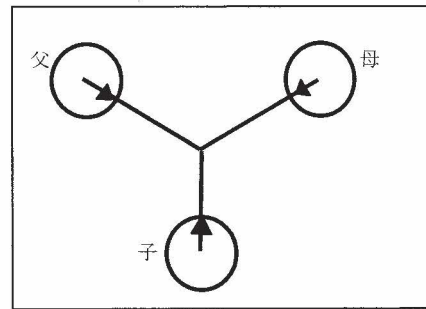


図8 i4型のパターン図

各クラスターの自由記述を調べた結果、i1型は大きく分けて「父と母が最も力を持っている」、「父と母は仲良くあってほしい」という記述と、「自立していきたい」や「過干渉にならない」という記述の2種類あった。i2型では、「兄弟関係の良好」について記述する調査協力者が多かった。i3型は、「父が母に寄り添ってほしい」や「父が子どもに対しても目を向けてくれる」というように、父親に対する希望を記述する者が多かった。i4型は、「家族みんなが互いの方向をむいている」や「お互いを思いやる」といった記述が多く見られた。

3.2 家族関係の認知と精神的健康の関連

(1) 現実の家族図式のパターンとUPI得点

現実の家族図式の4パターンについて、UPI得点に差がみられるかどうかを検討する。表3は、現実の家族パターンによるUPI自覚症状得点の平均値と標準偏差を示したものである。現実のパターンを独立変数、UPIの自覚症状の得点を従属変数とし、1要因分散分析を行った結果、有意な差がみられた($F(3, 92) = 3.28, MSE = 104.68, p = .025$)。Dunnett T3による多重比較を実施したところ、r3型の方がr1型より自覚症状の得点が高かった。つまり、r2型・r3型はr1型・r4型より精神的健康度が低かった。

表3 現実の家族パターンによるUPI自覚症状得点

	度数	平均値	標準偏差
r1型	28	12.29	9.01
r2型	24	18.50	11.71
r3型	32	18.44	10.34
r4型	12	10.92	9.38

(2) 現実と理想のズレとUPI得点

各成員間の距離または向きのズレが小さい群と大きい群に分けた。群分けでは、「現実-理想」で求めた数値を絶対化し、そのうえで、それぞれの平均値を境に2群に分けた。両群によるUPIの自覚症状得点の差を検討するためにt検定を行った(表4)。その結果、父子距離と父母の視線交錯度において、ズレ大群とズレ小群に差が認められた(父子距離： $t(93) = 2.16, p = .033$, 父母視線交錯度： $t(94) = 2.84, p = .006$)。父子距離と父母の視線交錯度のいずれにおいても、ズレの大きい群の方が小さい群より、UPI得点が高かった。つまり、父子距離または父母の視線交錯度において、現実と理想でズレが大きい者は精神的健康度が低いことがわかった。

表4 各成員間の距離・視線交錯度におけるズレ大群・ズレ小群の平均値と標準偏差

		度数	平均値	標準偏差	t値
父母距離	小群	62	15.26	11.12	.49
	大群	32	16.41	9.68	
父子距離	小群	62	14.11	9.78	2.16
	大群	33	18.97	11.53	
母子距離	小群	60	14.38	9.90	1.61
	大群	36	17.94	11.45	
父母視線交錯度	小群	55	13.16	9.54	2.84
	大群	41	19.15	11.07	
父子視線交錯度	小群	59	14.49	10.05	1.44
	大群	37	17.68	11.27	
母子視線交錯度	小群	56	14.63	10.57	1.20
	大群	40	17.25	10.56	

4. 考察

4.1 大学生の現実の家族関係の認知

大学生の現実の家族関係の認知は、4つのパターンに分類された。各パターンの成員間の視線交錯度の平均値を考慮し、r1型から順に名前をつけるとすれば、r1型は「家族まとまり型」、r2型は「父母向き合い型」、r3型は「父子向き合い型」、r4型は「母子向き合い型」と言えるだろう。

各クラスタの自由記述の特徴をまとめると、r1型（「家族まとまり型」）は「家族の仲がとてもよい」という記述が大半で、家族仲が良好だと認識していた。r2型（「父母向き合い型」）はポジティブな記述と、ネガティブな記述の両方が含まれ、葛藤を示していた。ネガティブ記述から、家族内で誰かが孤立していることが推測され、「私」の関心が父親と母親にあまり向けられなかったのではないと思われる。r3型（「父子向き合い型」）は視線交錯度が全体的に小さく、父子が中程度に向き合っており、父親が単身赴任で不在であるという記述が多かった。r4型（「母子向き合い型」）は、「母が全体を仕切っている」といった記述が多く、母親が家族内で中心的存在であると認知している者が多いと考えられる。

家族関係単純図式投影法を用いた先行研究では、各成員間の距離において有意な差が認められている。しかし、本研究では、家族イメージ法を採用したため現実の家族図式において距離に有意差はみられなかった。家族イメージ法と家族関係単純図式投影法との大きな違いは、「向き」が考慮されている点である。調査協力者は、距離だけでなく、「向き」にも配慮して家族図式を作成するため、距離で家族関係を投影しようとする意識が薄れ、その分「向き」に家族の関係性が投影された結果、相互干渉により距離にその効果が見られなかったと考えられる。

4.2 大学生の理想の家族関係の認知

理想の家族関係の認知についても、4つのパターンに分類された。各クラスタの成員間の視線交錯度の平均値を考慮すると、i1型は父母が向き合っており、それを見るように子が父母に対して向き合っていることが特徴だといえるだろう。i2型は父が孤立し、母子間が密接になっている。i3型は父子間が向き合っている。i4型は各家族成員が中心を向いていることが特徴だと考えられる。

各クラスタの自由記述では、i1型は「父と母は仲良くあってほしい」という記述が見られたことから、家族図式において父母の向き合いが大きくなったと考えられる。また、各成員間の距離が適度に離れていながらも、向き合っているという特徴は、「自立していきたい」や「過干渉にならない」といった記述からうかがえるように、親と一定の距離を置きつつも、関心を持っていてほしいという思いの表れだと考えられる。

i2型では、「兄弟関係の良好」について記述が多かった。家族図式を作成する際は、分析の対象である父、母、子以外の家族成員についても考えてもらったため、関心の対象が父、母より兄弟に向けられていると考えられる。

父子が向き合っている i3 型は、「父が母に寄り添ってほしい」や「父が子どもに対しても目を向けてくれる」というように、父親に対しての希望を記述する者が多かった。

子どもが父親と母親の両方に向いている i4 型は、「家族みんなが互いの方向を向いている」や「お互いを思いやる」といった記述が多く見られ、家族成員間の平等性という認知だと考えられる。

茂木(2003)は、家族関係単純図式投影法を実施し、どのような現実の家族関係であっても、理想として描かれる家族関係は、親子世代間型か、家族平等型に集約されると述べている。本研究では親子世代間型のパターンは見られなかったが、i4 型は、家族成員間の距離も比較的近く、中心を向いているパターンがあることから、「向き合い」に着目した場合の家族平等型であると考えられる。

4.3 現実の家族図式のパターンと UPI 得点の関連について

4 つの現実の家族パターンによって、UPI の自覚症状得点の平均値に差がみられた。父子間が中程度に向き合っている r3 型の方が、父母、父子、母子間のいずれも向き合っている r1 型より、精神的健康度が低いことが示唆された。父母間の向き合いが大きい家族図式は、両親関係を良好に認知し、父母間の向き合っていない家族図式より精神的健康度が高いと考えられる。よって、仮説 1 の一部が支持された。

現実の家族図式では、大学生は父母間の心理的距離が家族の健康度と深く関連する(草田, 1995・茂木, 1996)が、本研究では父母間の向き合い度だけでなく、父子・母子間の向き合い度も関連していた。心理的健康度に影響を与えるのは、父母間の関係性だけに限定されないことが明らかになった。

また、先行研究(小島, 2011)では、現実の家族図式のパターンと抑うつ得点に有意な差は見られなかった。「向き」を考慮することによって、より明確に家族図式をパターン分類できたと考えられる。

4.4 現実と理想のズレと UPI 得点

各成員間の距離と視線交錯度において、現実から理想を引いたものに絶対値をとることで、現実と理想の認知のズレの指標とし、各成員間の距離または視線交錯度のズレが小さい群と大きい群による UPI の自覚症状得点の差を検討した。分析の結果、父子間の心理的距離と父母の向き合いに関して、現実と理想の関係に対する認知のズレの大きい群の方が小さい群より精神的健康度が低いことが明らかになった。よって、仮説 2 の一部が支持された。

草田(1996, 2002)は、現実と理想の家族図式において、家族成員の心理的距離のギャップが大きいほど、現実の家族関係に満足していない傾向があることを示している。このことから、現実と理想の父子距離のズレが大きい調査協力者は、現在の家族関係に満足していないといえる。近年の父子関係については、末盛(2004)が労

働時間と通勤時間が長い場合、父親は子どもと関わる時間が少なくなる傾向が指摘されている。本研究でも父親の単身赴任により、父と子が心理的に離れる傾向がみられた。

父母の向き合いは、父母の関係性を表していた。現在の父母の関係性に満足していない大学生は、精神的健康度が低いと考えられる。

5. 総合考察と今後の課題

本研究は、投影法による家族イメージ法を用いて、距離と視線交錯度（向き）を測定の際として採用することで、大学生が認知する現実の家族関係や、理想の家族関係の特徴を分類することができた。現実の家族関係では、家族仲が良好である型、家族内で誰かが孤立している型、家族成員が全体的に疎遠な型、母子が強く結び付いている型に分類された。理想の家族関係では、父母関係が良好な家族、兄弟関係が良好な家族、父親の家族に対する関心が高い家族、成員同士が平等な家族に分類された。

現実の家族関係の認知が及ぼす精神的健康への影響は、大学生の精神的健康度調査に使用されることの多い質問紙法のUPIを用いて調査した。父母の良好な関係性が、子どもの精神的健康にプラスの影響を及ぼしていることが示唆された。父親が不在の多い家族関係は、父親が家族にもっと目を向けることを子どもは望んでおり、大学生の年齢でも父親からのサポートが必要なことが示唆された。家族関係の類型は、子どもの精神的健康度が低い家族とそうでない家族をスクリーニングする際、おおまかではあるが弁別の指標として有効であると思われた。

家族イメージ法で家族像を把握するには、これまで「距離」が採用されてきたが、「向き」も一つの指標として考慮する必要性が示された。視線交錯度を用いる場合は、向き合いが平行による0度と、向き合いが相反する0度の区別を検討することで、家族図式の型を一層明確に分類できるだろう。また、「向き」が表す意味については、今後の調査が必要である。

本研究は親子関係の分析と自由記述に止まった。祖父母や兄弟関係の自由記述も多数あった。祖父母や兄弟関係は、家族システムの原因となる場合もあれば、子どもにとって外的資源になる場合も考えられる。父・母・子の3者関係だけでなく、祖父母や兄弟など幅広い家族関係を取り込んで、今後の研究を展開したいと考える。

引用文献

- 秋丸貴子・亀口憲治 1988 家族イメージ法による家族関係認知に関する研究 家族心理学研究 Vol.2, No.1, pp.61-74.
- 亀口憲治(監) 2003 FIT(家族イメージ法)マニュアル システムパブリカ シス

テム心理研究所(編)

- 亀口憲治 2010 家族心理学特論 放送大学教育振興会 改訂新版 pp.105.
- 小島弓枝 2011 青年期における家族関係の認知と抑うつ感の関連—家族関係単純図式投影法を用いた研究— 北星学園大学大学院論集 No.2, pp.95-105.
- 草田寿子 1995 家族関係単純図式投影法の基礎的研究—家族関係査定法としての可能性— カウンセリング研究 Vol.28, No.1, pp.21-27.
- 草田寿子 1996 家族関係単純図式投影法の基礎的研究Ⅲ—家族図式に表現された中学生の家族関係パターン— カウンセリング研究 Vol.29, No.3, pp.208-216.
- 草田寿子 2002 家族関係単純図式投影法—家族アセスメントの視点から— 人間科学研究(文教大学人間科学部) No.24, pp5-10.
- 茂木千明 1996 家族関係単純図式投影法による健康な家族関係—予備的研究— 仙台白百合女子大学紀要創刊号 pp.135-143.
- 茂木千明 2003 家族図式による現実と理想の家族関係の比較—家族関係単純図式投影法を用いた体験学習から— 仙台白百合女子大学紀要 Vol.7, pp.29-43.
- 西出隆紀・夏野良司 1997 家族システムの機能状態の認知は子供の抑鬱感にどのような影響を与えるか 教育心理学研究 Vol.45, No.4, pp.456-463.
- Rogers, C. R. 1951 Client-Centered Therapy: Its Current Practice, Implication, and Theory 保坂亭・諸富祥彦・末武康弘(訳) 2005 ロジャース主要著者集2 クライアント中心療法 岩崎学術出版社
- 沢崎達夫・松原達哉 1988 大学生の精神健康に関する研究(1)—筑波大学新入生に対するUPIの結果— 筑波大学心理学研究 Vol.10, pp.183-190.
- 柴崎暁子・丹野義彦・亀口憲治 2001 家族イメージ法のプロトコル分析と再検査信頼性の分析 家族心理学研究 Vol.15, No.2, pp.141-148.
- 末盛慶 2004 父親と子どもの接触頻度の規定要因 渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子(編) 現代家族の構造と変容—全国家族調査[NFRJ98]による計量分析— 東京大学出版会 pp.231-243.
- 高橋靖恵 2008 青年期の心理療法と家族のライフスタイル 箱田裕司・滝口俊子・岡本裕子・林智一・岡堂哲雄・高橋靖恵(編) 家族のライフサイクルと心理療法 金子書房 pp.21-50.
- 徳田仁子・柴田美文 2005 家族関係の再構築における居住形態の意義について—家族イメージ法と肯定的家族観尺度を用いて— 札幌学院大学人文学会紀要 Vol.78, pp.51-65.

(2012年6月6日 受付)

(2012年9月18日 受理)